

坂口安吾

風博士

風
博
士

諸君は、東京市某町某番地なる風博士の邸宅を御存じ
 であろう乎？ 御存じない。それは大変残念である。そ
 して諸君は偉大なる風博士を御存知であろうか？ な
 い。嗚呼。では諸君は遺書だけが発見されて、偉大なる
 風博士自体は杳として紛失したことも御存知ないであろ
 うか？ ない。嗟乎。では諸君は僕がその筋の嫌疑のた
 めに並々ならぬ困難を感じていることも御存じあるま
 い。しかし警察は知っていたのである。そしてその筋の

計算に由れば、偉大なる風博士は僕と共謀のうえ遺書を捏造して自殺を装い、かくてかの憎むべき蛸博士の名誉毀損をたくらんだに相違あるまいと睨んだのである。諸君、これは明らかに誤解である。何となれば偉大なる風博士は自殺したからである。果して自殺した乎？ しかり、偉大なる風博士は紛失したのである。諸君は軽率に真理を疑っていいのであるか？ なぜならば、それは諸君の生涯に様々な不運を齎らすに相違ないからである。真理は信ぜらるべき性質のものであるから、諸君は偉大なる風博士の死を信じなければならぬ。

そして諸君は、かの憎むべき蛸博士の——あ、諸君はかの憎むべき蛸博士を御存知であろうか？ 御存じない。噫呼あ、それは大變残念である。では諸君は、まず悲痛なる風博士の遺書を一読しなければなるまい。

風博士の遺書

諸君、彼は禿はげ頭あたまである。しかり、彼は禿頭である。禿頭以外の何物でも、断じてこれあるはずはない。彼は

鬢かづらをもつてこれの隠蔽いんぺいをなしおるのである。ああこれ
 実に何たる滑稽こっけい！　しかり何たる滑稽である。ああ何た
 る滑稽である。かりに諸君、一撃いちげきを加えて彼の毛髪もうはつを強奪ごうだつ
 せりと想像したまえ。突如とつじよ諸君は氣絶せんとするのであ
 る。而しなうして諸君は氣絶以外の何物にも遭遇そうぐうすることは
 不可能である。すなわち諸君は、猥褻わいせつ名状すべからざる
 無毛赤色の突起体に深く心魄しんぱくを打たるるであろう。異様
 なる臭気しゆうきは諸氏の余生に消えざる歎なげきを与えるに相違な
 い。忌憚きたんなく云いえば、彼こそ憎むべき蝮かぶである。人間の
 仮面かぶを被り、門にあらゆる悪計あくけいを蔵かくすところの蝮はすな

わち彼に外ほかならぬのである。

諸君、余を指して誣告ぶこくの誹そしりを止めやたまえ、何となれば、真理に誓ちかつて彼は禿頭である。なお疑わんとせば諸君よ、巴里府モンマルトル三番地、Bis, Perruquier ショオブ氏に訊ききたまえ。今を距へだたること四十八年前のことなり、二人の日本人留学生によって鬢あがなの購あがなわれたることきおくを記憶せざるや。一人は禿頭にして肥満すること豚児とんじのごとく愚昧ぐまいの相を漂ただよわし、その友人は黒髪明眸こくはつめいぼうの美少年なりき、と。黒髪明眸なる友人こそすなわち余である。見たまえ諸君、ここに至つて彼は果然四十八年以前

より禿はげていたのである。於あ戲あ實げに慨が嘆いたんの至いたりに堪たえんではない乎！ 高こう尚しょうなること櫛かしわの木のごとき諸君よ、諸君はなにゆえ彼ごとき陋ろう劣れつ漢かんを地上より埋まい没ぼつせしめんと願わざる乎。彼は鬢まんをもつてその禿頭ちやくを瞞まん着ちやくせんとするのである。

諸君、彼は余の憎むべき論敵である。単なる論敵であるか？ 否いな否いな否いな。千遍せん否ぺん。余の生活のすべてにおいて彼はまた余の憎むべき仇きゆう敵てきである。實げに憎むべきであるか？ しっかり實に憎むべきである！ 諸君、彼の教養たるや浅薄せん至はく極しやくでありますぞ。かりに諸君、聡明そうめいなること

世界地図のごとき諸君よ、諸君は学識深遠なる蛸まんべんの存在を認容することが出来るであろうか？ 否否否、万遍否。余はここにあって彼の無学を公開せんとするものである。

諸君は南欧なんおうの小部落バスクを認識せらるるであろうか？ もしも諸君が仏蘭西フランクス、西班牙スペイン両国の国境をなすピレネエ山脈をさまようならば、諸君は山中に散在する小部落バスクに逢ほうちやく着するのである。この珍奇ちんきなる部落は、人種、風俗、言語において西欧の全人種に隔絶かくぜつし、実に地球の半廻転はんかいてんを試みてのち、極東じゃぼん国にいたって

初めて著いちじるしき類似を見出すのである。これ余の研究完
 成することなくしては、地球の怪談かいだんとして深く諸氏の
 心胆しんたんを寒からしめたに相違ない。而して諸君安んぜよ、
 余の研究は完成し、世界平和に偉大なる貢献こうけんを与えたの
 である。見たまえ、源みなもとのよしつね義経は成吉思汗ジンギスカンとなつたので
 ある。成吉思汗は欧洲おうしゅうを侵略しんりやくし、西班牙スペインに至つてその
 消息を失うたのである。しかり、義経及びその一党およはピ
 レネエ山中最も氣候の温順なる所に老後の隠栖いんせいを卜ぼくした
 のである。これすなわちバスク開闢かいびやくの歴史である。し
 かるに嗚乎、かの無礼なる蛸博士は不遜ふそん千万せんばんにも余の偉

大なる業績に異論を説とえたのである。彼は曰いわく、蒙古の
 歐洲侵略は成吉思汗の後継者太宗の事蹟じせきにかかり、成吉
 思汗の死後十年の後に当る、と。実に何たる愚論ぐろん浅識せんしきで
 あろうか。失われたる歴史において、単なる十年が何で
 ある乎！ 実にこれ歴史の幽玄ゆうげんを冒瀆ぼうとくするも甚はなはしいで
 はないか。

さて諸君、彼の悪徳を列举するは余の甚はなはだ不本意と
 するところである。なんとなれば、その犯行は奇想天外
 にして識者の常識を肯がえんぜしめず、むしろ余に対して
 誣告ぶこくの誹そしりを発せしむる憾うらみあるからである。たとえば

諸君、頃日余の戸口に Banana の皮を撒布し余の殺害を
 企てたのも彼の方寸に相違ない。愉快にも余は臀部及
 び肩胛骨に軽微なる打撲傷を受けしのみにて脳震盪の
 被害を蒙るにはいたらなかつたのであるが、余の告訴
 に対し世人は挙げて余を罵倒したのである。諸君はよく
 余の悲しみを計りうるであろう乎。

賢明にして正大なること太平洋のごとき諸君よ。諸君
 はこの悲痛なる椿事をも黙殺するであろう乎。すなわち
 彼は余の妻を寝取ったのである！ 而して諸君、再び
 明敏なること触鬚のごとき諸君よ。余の妻は麗わしき

こと高山植物のごとく、実に単なる植物ではなかつたのである！ ああ三度冷静なること扇風機せんぷうきのごとき諸君よ、かの憎むべき蛸博士は何等の愛なんらなくして余の妻を奪うばつたのである。何となれば諸君、ああ諸君永遠に蛸なる動物に戦慄せんりつせよ、すなわち余の妻はバスク生れの女性であつた。彼の女じよは余の研究を助くること、疑いもなく地の塩であつたのである。蛸博士はこの点に深く目をつけたのである。ああ、千慮せんりよの一失いっしつである。しかり、千慮の一失である。余は不覚にも、蛸博士の禿頭なる事実を余の妻に教えておかなかつたのである。そしてそのために

不幸なる彼の女はついに蛸博士に籠絡せられたのである。

ここにおいてか諸君、余は奮然蹶起したのである。打

倒蛸！ 蛸博士を葬れ、しかり、膺懲せよ、憎むべき

悪徳漢！ しかりしかり。ゆえに余は日夜その方策を練

ったのである。諸君はすでに、正当なる攻撃は一つとし

て彼の詭計に敵し難いゆえんを了解せられたに違いな

い。而して今や、唯一策を地上に見出すのみである。し

かり、ただ一策である。ゆえに余は深く決意をかため、

鳥打帽に面体を隠してのち夜陰に乗じて彼の邸宅に忍び

入ったのである。長夜にわたって余は、錠前じょうまえに関する
 およそあらゆる研究書を読破しておいたのである。その
 ために、余は空気のごとく彼の寢室しんしつに侵入することが出
 来たのである。そして諸君、余は何のたわいもなくかの
 憎むべき鬘かつらを余の掌しょうちゆう中に収めたのである。諸君、目前もくぜん
 に露出ろしゅつする無毛赤色の怪物かいぶつを認めた時に、余は実に万感ばんかん
 胸にせまり、溢あふれ出る涙なみだを禁じ難かつたのである。諸
 君よ、翌日の夜明けを期して、かの憎むべき蛸たこはついに
 蛸自体の正体を遺憾いかんなく暴露ばくろするに至るであろう！ 余
 は躍おどる胸に鬘かつらをひそめて、再び影かげのごとく忍び出たので

ある。

しかるに諸君、ああ諸君、おお諸君、余は敗北したのである。悪略神の如しとはこれか。ああ蛸は曲者くせものの中の曲者である。誰たれかよく彼の深謀遠慮しんぼうえんりよを予測しうるであろう乎。翌日彼の禿頭は再び鬢に隠されていたのである。実に諸君、彼は秘ひそかに別の鬢を貯蔵していたのである。余は負けたり矣。刀折れ矢尽つきたり矣。余の力をもつてして、彼の悪略に及ばざることすでに明白なり矣。諸氏よ、誰人かよく蛸を懲こらす勇士なきや。蛸博士を葬れ！彼を平なる地上より抹殺まっさつせよ！ 諸君は正義を愛さざる

乎！ ああやむをえん次第である。しからば余の方より消え去ることにきめた。ああ悲しいかな。

諸君は偉大なる同博士の遺書を読んで、どんなに深い感動を催もよおされたであろうか？ そしてどんなに劇はげしい怒いかりを覚えられたであろうか？ 僕にはよくお察しすることが出来るのである。偉大なる風博士はかくて自殺したのである。しかり、偉大なる風博士は果して死んだのである。極めて不可解な方法によって、そして屍しがい体を残さない方法によって、それが行われたために、一部の人々

はこれを怪あやしいと睨にらんだのである。ああ僕は大変残念である。それゆえ僕は唯一ゆいいつの目撃者として、偉大なる風博士の臨終をつぶさに述べたいと思うのである。

偉大なる博士は甚だ周章あわて者であつたのである。たとえば今、部屋の西南端せいなんたんに当る長椅子ながいすに腰懸こしかけて一冊の書に読み耽ふけっていると仮定するのである。次の瞬間しゆんかんに、偉大なる博士は東北の肱掛椅子ひじかけいすに埋うもれて、実にあわただしく頁ページをくつているのである。また偉大なる博士は水を呑のむ場合に、突如コップを呑み込こんでいるのである。諸君はその時、実にあわただしい後悔こうかいと一緒にいっしょに黄昏たそがれに似

た沈黙ちんもくがこの書齋しよさいに閉じ籠こもるのを認められるに相違ない。したがって、このあわただしい風潮は、この部屋にあるすべての物質を感化せしめずにおかなかつたのである。たとえば、時計はいそがしく十三時を打ち、礼節正しい来客がもじもじして腰を下そうとしない時に椅子は劇しい痲癩かんしやくを鳴らし、物体の描えがく陰影いんえいは突如太陽に向つて走り出すのである。すべてこれらの狼狽ろうばいは極めて直線的な突風を描いて交錯こうさくするため、部屋の中には何本もの飛ぶ矢に似た真空せんこうが閃光を散らして騒さわいでいる習慣であつた。時には部屋の中央に一陣いちじんの竜巻たつまきが彼自身もま

た周章あわてふためいて湧わき起ることもある。その刹那せつな偉大なる博士はしばしばこの竜巻に巻きこまれて、拳こぶしを振りながら忙せわしく宙返りを打つのであった。

さて、事件の起った日は、ちょうど偉大なる博士の結婚式けっこんしきに相当していた。花嫁はなよめは当年十七歳さいの大変美しい少女であった。偉大なる博士が彼の女に目をつけたのはさすがに偉大なる見識といわねばならない。何となればこの少女は、街頭に立って花を売りながら、三日というものの一本の花も売れなかったにかかわらず、主として雲を眺ながめ、時たまネオンサインを眺めたにすぎぬほど悲劇

に対して無邪氣むじやきであつた。偉大なる博士ならびに偉大な
 博士等の描く旋風せんふうに対照して、これほどふさわしい少
 女は稀まれにしか見当らないのである。僕はこの幸福な結婚
 式を祝福して牧師の役をつとめ、同時に食卓しょくたく給仕人と
 なる約束やくそくであつた。僕は僕の書齋さいだんに祭壇さいだんをつくり花嫁と
 向き合せに端坐たんざして偉大なる博士の来場を待ち構えてい
 たのである。そのうちに夜が明け放はなれたのである。さ
 すがに花嫁は驚おどろくような軽率おだやはしなかつたけれど、僕
 は内心おだや穩かではなかつたのである。もしも偉大なる博
 士は間違えて外の人に結婚を申し込んでいるのかも知れ

ない。そしてその時どんな恥はじをかいて、地球一面にあわただしい旋風を巻き起すかも知れないのである。僕は花嫁に理由を述べ、自動車をいそがせて恩師の書齋へ駆けつけた。そして僕は深く安心したのである。その時偉大なる博士は西南端の長椅子に埋もれて飽あくことなく一書を貪むさぼり読んでいた。そして、今、東北端の肱掛椅子から移転したばかりに相違ない証拠しょうこには、一陣の突風が東北から西南にかけて目に沁しみ渡わたる多くの矢を描きながら走っていたのである。

「先生約束の時間がすぎました」

僕はなるべく偉大なる博士を脅おびやかささないように、特
 に静せいしゆく肅じゆうなポオズをとって口上こうじようを述べたのであるが、結
 果においてそれは偉大なる博士を脅おびやかすに充じゆう分ぶんであつ
 た。なぜなら偉大なる博士は色は褪あせていたけれど燕尾えんび
 服ふくを身にまとい、そのうえ膝ひざ頭がしらにはシルクハットを載の
 せて、大變立派なチューリップを胸のボタンにはさんで
 いたからである。つまり偉大なる博士は深く結婚式を期
 待し、同時に深く結婚式を失念したに相違ない色々の条
 件を明示していた。

「POPPO!」

偉大なる博士はシルクハットを被り直したのである。そして数秒の間あいだ疑わしげに僕の顔を凝視みつめていたが、やがて失念していたものをありありと思い出した深い感動が表れたのであった。

「T A T A T A T A T A H !」

すでにその瞬間、僕は鋭い叫びさけ声をきいたのみで、偉大なる博士の姿は蹴飛ばけとされた扉とびらの向う側に見失っていた。僕はびっくりして追跡ついせきしたのである。そして奇蹟の起ったのはすなわちちようどこの瞬間であった。偉大なる博士の姿は突然消え失うせたのである。

諸君、開いた形跡のない戸口から、人間は絶対に出入しがたいものである。したがって偉大なる博士は外へ出なかつたに相違ないのである。そして偉大なる博士は邸宅ていたくの内部にも居なかつたのである。僕は階段の途中とちゆうに凝縮ぎようしゆくして、まだ響ひびき残っているその慌あわただしい跫音あしおとを耳にしながら、ただ一陣の突風が階段の下に舞まい狂くるうのを見たのみであつた。

諸君、偉大なる博士は風となつたのである。果して風となつたか？ しっかり、風となつたのである。何となればその姿が消え失せたではないか。姿見えざるはこれす

なわち風である乎？　しかり、これすなわち風である。何となれば姿が見えないではない乎。これ風以外の何物でもあり得ない。風である。しかり風である風である風である。諸氏はなお、この明白なる事実を疑うたぐるのである。それは大變残念である。それでは僕は、さらに動かすべからざる科学的根拠こんきよを付け加えよう。この日、かの憎むべき蛸博士は、あたかもこの同じ瞬間において、インフルエンザに犯されたのである。

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行



日本文学電子図書館